

盟友レ○プ！ 野獣と
化した当主

奇怪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

或る真夏の昼下がりに、シルバーアッシュは密かに思いを寄せる盟友　ドクターを自宅へと招待する。用意していた完璧な計画を実行するために…。

サカリのついた獣の杖使い　地下室に響きわたる新銀斬のSE

目次

- 1 盟友レ○プ！ 野獣と化した当主

「悔い改めよう」

玄関に入るなり、シルバーアツシユが合唱の礼を取る。

イエラグの巫女の立ち場のプラマニクスはシルバーアツシユの妹だ

だが、公式の場で彼女と会うときは実の兄であるシルバーアツシユでさえ

彼女に向つて合唱しなければならぬという

実の妹との関係 それ自体イエラグという国の複雑さが見え隠れしてしまう。

「今日は本当疲れたよ…」

案内されたソファアに座り、溜息と共に言葉が零れてしまう。

「そうだな 今日も演習きつかったな」

そうシルバーアツシユが口にする。まるで大変そうに言っているが

傍から見たらそう見えない

「契約が近いからな しようがないな」

今現在ロドスを取り巻く環境は悪い

龍門との相互協定が破棄された今、ロドスは補給線の確保に頭を抱えている。

製薬会社という顔だけではなく、戦闘集団という側面を抱えており、更に現状

優秀なオペレーター確保に全力を注いでいる。

だが、人材の登用には凄まじい資金（リアルマネー）が必要であり、またその育成にも莫大な

資材及び龍門幣が必要になっている。

今現在のロドス自身の貿易所での収益だけではとても賄えなくなっている。

そこで、持ちかけられたのが危機契約

各国・企業・特定個人からの依頼を達成し報酬を貰う相互支援組織

言つてしまえば問題解決屋だ

だが、そこには各国の思惑や、任務遂行に対する細かな指定、戦闘に不向きな地形での戦闘など

通常戦闘よりも遥かに厳しい戦いの舞台がある。

だが、ここで補給を成功させないと今後の作戦遂行に支障が出る。

だからこうして契約確認及び演習の為にエラグまでやってきたのだ

「今日の契約はどうだった？」

「いやあ…。」

「伸びそうか？」

「伸びない…。」

「緊張すると力がでないからな　しょうがないな」

「そうなんだよね…」

「ベスト出せるようにな」

「ウン…」

そう優しく励ましてくれるシルバーアツシュ

実際彼は記憶のない自分に対して 盟友だから という理由だけで

ロドスに協力してくれている。しかも明らかにシルバーアツシュ及び

カランド貿易に対して不利な条件でだ。

「まずウチには屋上があるんだが… 休んでいくか？」

突然シルバーアツシュがサウナに誘ってくれた

この所ろくに休めていない自分を気遣ってくれているのだろう。

「ああいいつすねえ！」

何故だが分らないが、今自分は実際疲れているんだろう

思ったより大きい声が出てしまったが、ここはお言葉に甘えよう

ミーニンミンミン (オリジンシ兄貴、迫真の演技)

イエラグは年中厳しい寒さに覆われているイメージがあるが、晴れ晴れとした天気をしていた。

だが、目の前のカランド山は雪に覆われている。

目の前の広大な自然を前に戦場を渡り歩いてきた癖からか、誰か視線を勝手に予測してしまう。

しかも無防備な状態でだ、少し恥ずかしくなってくる。

「見られないかな」

「大丈夫だ、まあ多少はな」

服を脱ぎながら答えるシルバーアッシュ それは当主として堂々とした態度をしており、自分も

それに倣う。用意された水着に着替え、マットに寝そべる。北国のひんやりとした風の中から

照り付ける太陽が自分たちを焼いていく。

「暑いなあ」

「暑いな。オイル塗ってやろうか」

本場に準備の良いやつだと思いつながら、厚意に甘える。

時折オイルを塗っている手が色んな場所に触れる度ドキッとしてしまう。

「仕事の疲れが）溜まってるなあおい どんぐらい休んでないんだ？」

「もう二か月くらい…」

「二か月…だいが溜まってるなアゼルバイジャン（イエラグ語で危ないを意味する）」

シルバーアツシュの顔が厳しくなり、その眼光も鋭くなっている。

ロドスに救出されてから、アーミヤたちを少しでも手助けできたらとロドスの業務をこなしていたが、気が付けば膨大な仕事に埋もれていく日々だった

アーミヤもロドスCEOとして自分に厳しく仕事を頼んでいく。

休む時間さえ許されないほどだ。

自分ばかりしてもらうのも悪い気がしてきて、自分もシルバーアツシュにオイルを塗っていく

「あんまり上手いから気持ちよくなってきたよ…」

シルバーアツシュの顔が綻んできて、お世辞でもうれしくなってくる。

彼には借りばかり作ってしまうため、こんな形でしか返せないもどかしさを感じる。

「（自分の尻尾が）硬くなってしまったよ…」

だが、そんな些細なことさえ、シルバーアツシュは自分を気遣い、喜びをあらわに

してくれる。

「喉渴いたな…喉渴かないか？」

サウナに籠って何分経ったのか分からないが、確かに暑さから喉が渴いてきた。

「何か飲み物持つてくる。ちよつと待つてろ」

そう言いながら、立ち上がり飲み物を取ってきてもらおう。

甘えすぎだなど思いつつ、再びマットの上に横になる。

a m 09 : 31

シルバーアツシユ邸 台所

飲み物を入れる為に、台所に立つシルバーアツシユ

本来こういう仕事は使用人が行うものだが、彼が手にしている物が誰にも知られたくないことを匂わせている。

サツ！

二つあるアイスティーのうち、一つに白い粉を入れていく。

それを入れている時のシルバーアツシユの顔は、何か覚悟を決めたような顔をしていった。

「待たせたな アイステイーしかなかったんだが、いいか?」

「イタダキヤス」

アイステイーを受け取り、乾いた喉に一気に流し込む。

熱く火照った体にアイステイーが染み込むような気さえしてくる。

「休めたか? ちよつと これもうわかんないな…お前はどうか?」

「顔色が良くなってる。はつきりわかんだね」

自分では分からないが、どうやらさつきまでの自分はひどく疲れた顔をしていらしい。

連日演習に次ぐ演習、人員の育成、日毎に代わる契約、基地での人員配置

残り少ない理性を減らしつつ、理性回復材で無理やり回復して仕事する日々

思えば、それを見越してここに招待してくれたのだろう。

だが、そろそろ帰らねばアーミヤに叱られる。

そう思っ立ち上がった瞬間、ふらつく自分

「おつ、大丈夫か? 大丈夫か?」

それを咄嗟に支えてくれるシルバーアツシュ どうやら立ち眩みを起こしたらしい、

そんなことを呑気に考えながら、意識が沈んでいった

a m 11:45:14

目を覚ますと布団の上だった。そして、目の前にはシルバーアツシユの顔があり、寝てしまったと謝ろうとした時に

自分の腕が拘束されることに気づく。

そしてシルバーアツシユが自分に襲い掛かってきた。

「アツシユ!?何してるの!?! やめてくれよ本当に!」

「暴れんなよ... 暴れんなよ...!」

今までの自分を気遣うシルバーアツシユとは違う野獣のような姿に衝撃を隠せなかった。

「シルバーアツシユ!?! まずいですよ!」

シルバーアツシユが尻尾に薬を染み込ませながら、自分の口に押さえつけてくる。

チラチラ見える薬の瓶には 理性蒸発剤 の文字が見え隠れしていた。

「な、何してるの!?!ちよつとホントに!?!」

ますます何が起こっているのか分からない自分に、理性蒸発剤の効果なのか、思考がぼやけてくる。

オマエ

「盟友のことが好きだったんだよ!」

突然の告白に本当の意味で理性が〇になる。

自分に対してシルバーアツシュが特別な感情を持っていたことは記憶がなくても察してはいた。

それは盟友としての感情だと自分は考えていた。

だが実際は、それ以上のものだ。と今この瞬間感じられた。

シルバーアツシュが自身の股間の杖（意味心）を持ちそれを勢いよくぶつけてきた。

シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン!

シルバーアツシュの杖（意味深）が自分にぶつかるたび、虹色が描かれる。

それは後先を考えない、野獣のような行動だった。

しかし、何故かその一撃一撃にシルバーアツシュの不器用な優しさを感じられた。

おそらく今の自分は普通ではないのだろう。肉体的、精神的な疲労に加え、理性蒸発材によって

何も考えられない状態でのシルバーアッシュの大胆な告白。

そんな中いつもの違うシルバーアッシュの行動に飲まれてしまう。

「気持ちいいかあ?」

「キモチイイ…」

「気持ちいいかア?」

「ン、キモチイイ、キモチイイ…」

「気持ちいいだろオ、気持ちよくなってきた」

「シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン! シャキーン!」

真銀斬のペースは衰える所か、攻撃速度が上がってきた気さえする。

「イクスギイ! アツー!」 シャキーン!

シルバーアッシュが最後の真銀斬を放ちお互いにHPが0になる。

シルバーアッシュの顔が近づいてくる。そのまま流れに身を流そうとすると

突然爆発音と共に、爆風が自分たちを巻き込んだ。

「ドクター?」

煙の中から現れたのはロドス最高責任者のアーミヤだった。

おそらく、帰りが遅くなった自分を迎えに来たのだろう。

怒っているのか、怒っていないのか、感情が分からない顔をしているが、

アーミヤの指輪は全て震えており、またアーミヤの後ろには暗く禍々しいナニカが佇んでいた。

「: : ドクターは渡しません」

抑揚のない声色が響き渡り、アーミヤの指がシルバーアツシユを捉える。

それに合わせて黒い波動が浮かび上がる。自分を巡って二人が争うのが

嫌で止めようとしたが、今までの疲れからかそのまま体が動けなくなってしまう。

最後にかすかに戻った理性が思ったことは、ケルシーになんて説明しようかな、

と思いつながら、再び意識が沈んでいった。

第四章
盟友○姦
f i n